BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

N0.91
2021.5.28

〒102-0094　千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館　３階Tel&fax03-3221-0019　Mail info@hosojin.jp

発行　一般社団法人・放送人の会　　会長　今野　勉　　　編集担当　伊藤雅浩（広報委員長・編集長）、菅野高至（ＨＰ担当）、鈴木典之、

新しい任期を迎えるにあたって

放送人の会会長　今野勉

ある雑誌からインタビューを受けた。私がテレビ局に入って仕事を始めた頃の話を聞きたいという。

私がラジオ東京テレビ（現ＴＢＳ）の演出部に配属されたのは昭和三四年（１９５９）である。ラジオ東京がテレビ放送を始めたのは、昭和三十年（１９５５）だから、まだ四年しか経っていなかった。一番古い先輩でもテレビの経験は四年である。制作現場に入ってから私は七百日間（およそ二年間）一日も休みを取らなかった（日曜日も含めて）という超多忙のＡＤ時代を送ったので、テレビ番組制作についての制作上の知識や実技については、あっという間に先輩に追いついた。

追いついた、などというと不遜に聞こえるかとも思うが、先輩たちは、大半がラジオから移ってきたプロデューサーやディレクターだったので、テレビカメラや照明や美術を使うテレビ番組には戸惑っていた。

その点、テレビ演出部に配属された私と同期の六人は、ほとんどが学生時代は映画青年で何人かは、映画撮影所でのアルバイトの経験者だった。彼らは、映画撮影所の徒弟制度的な雰囲気や施設の古めかしさ（撮影所には冷暖房の設備がなかった）に嫌気がさして、テレビ局に入ってきたのだ。若さが私たちの武器だった。そんな話をした。

今、テレビ黎明期の歴史はどう受け止められるのか

インタビューが載った雑誌が送られてきた。

インタビューをした編集者の感想が載っていた。私よりかなり若い編集者の視点は、なるほどそうか、と思わされるものだった。編集者は、テレビ黎明期の状況を次のように理解していた。

「特に興味深かったのは、テレビという当時最先端のメディアのコンテンツが、ラジオという古いメデイアから移ったベテランと、映画というラジオ以上に古いメディアに憧れていた（そして幻滅した）若者によってつくられていたという点だ」

古いメディアから新しいメディアへと変わる時、どこかにきっちりと線が引かれているわけではないのは解っているが、古いメディアを担ってきた者たちの中にも新しいメディアを生み出す何かが宿されていて、かつ、新しいメディアを担う者たちの中にも古いメディアへの憧れがあったりする、と指摘されてみると、我が身を振り返って、確かにそうだ、と肯く。

「古いメディア」テレビのこれから

この編集者の言葉はこう続く。「コロナ禍による在宅時間の激増で存在感を高めている　ＹｏｕＴｕｂｅだが、企画にしろテロップの入れ方にしろＹｏｕＴｕｂｅのキャラ作りにしろ、テレビの影響はとても色濃く感じられる」

新・旧のメディアの交代は、お互いに混合し影響を与えながら行われていくのは、今も昔も変わらないようだ。編集者はこう結論する。「テレビは『オワコン』と言われる一方で、テレビを主戦場にしてきた人々のコンテンツ作りは舞台を移しながら続いて行くのだろう」

さて本年度の「放送人の会」は

さて本年度の「放送人の会」は何をまずしなければならないだろう、と、編集者の言葉を反芻しつつ私はいま考えている。メディアの状況は激動の時代を迎えている。時代に相応の新しい課題に取り組むには、新しい世代の会員を迎えるのが必要とされる。そのことを私は痛感している。

本年は、会員や理事の皆さんの協力を得て「次なる時代の放送人の会」のための想を練り、実行に移していきたいと思っている。

進行中の「放送人の証言」のデジタル・アーカイブ化や出版化についても、その道筋をつける重要な年であることも変わりない。

コロナ禍の過ぎ去るのを待って、会員の皆さんの交流の場を設けることも、大事な案件である。

今年中にその機会が来ることを願って、新しい任期にあたってのご挨拶としたい。

放送人グランプリ2021（第20回）

放送人グランプリが今年で20回目という節目の回を迎えました。

今年度の選考委員会は昨年のメンバーを中心に招待委員の桧山珠美（放送批評家）、当会会員（50音順）石橋映里、小川和之、柏木登、佐々木彰、新山賢治、菅野高至、深尾隆一、三原治、八木康夫、矢島良彰、吉田賢策、渡辺紘史で会員の投票をもとに行い、アドバイザリー委員（松尾羊一、藤久ミネ、鈴木典之、河野尚行、隈部紀生）に意見を求め、4月初め左記のように決定しました。

なお、今回から、賞のタイトルは「準グランプリ」、「企画賞」などのタイトルをやめごらんのとおりのタイトルに致しました。

大山勝美賞の選考委員は招待委員の五十嵐文郎、当会会員の石橋冠、鈴木嘉一、鶴橋康夫で行い、3月下旬に決定しました。

コロナのせいで贈賞式はなかなかできません。昨年も贈賞式はできず、事務局では2回分をあわせて、小規模での表彰式がやれないかと検討中です。コロナがおさまり、贈賞式が開かれたら、受賞者の言葉など例年のようなグランプリの特集記事を次号に掲載します。今号では受賞者名、表彰理由、受賞者の経歴を掲載します。

グランプリ 大賞
金本麻理子

戦争という巨大な力に振り回される市民の姿を、自らカメラを回し追い続けるディレクター・金本麻理子さんの仕事が、２０２０年は「レバノンからのSOS～コロナ禍 追い詰められるシリア難民～」（NHKBS1スペシャル7月）、「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」（NHKスペシャル10月）という形で結実したことを評価する。

金本ディレクターの人の懐に飛び込む能力、特に家庭の中に入りこみ日常を撮影する力は傑出している。今回も「撮る力」がフルに発揮され、売春、臓器売買、DVなど壮絶な難民キャンプでの実態が記録された。撮影中に起こったコロナ感染拡大は、弱者として切り捨てられる人々の姿をさらに炙り出した。世界で最も過酷な現場に、一人カメラを持ち込み、女性と子どもに寄り添い、映像記録した意義は大きい。

金本氏には、原点となる二つの番組がある。一つは「マニラ市街戦～死者12万 焦土への一ヶ月～」（２００７年）、この取材を通し、戦争を大上段に構えず一人の市民とその家族を通し描いて行く覚悟が生まれた。もう一つの原点が「お母さんに会いたい～フィリピン・ムスリムの兄と妹～」（アジアに生きる子供たち２００４年）。金本氏はこのシリーズを通して自らカメラを回す手法を身につけた。２０２０年放送された番組は その一つの結実である。

〈経歴〉

１９９０年代から、主にNHKBSでドキュメンタリー作品を制作。２００４年NHKBS1・BSドキュメンタリー「アジアに生きる子供たち」シリーズの「お母さんに会いたい～フィリピン・ムスリムの兄と妹～」で注目される。

（主な作品）▼２００７年NHKBS・ハイビジョン特集「証言記録 マニラ市街戦」。▼２０１１年NHKBS戦争証言スペシャル「運命の２２日間～サハリン（樺太）はこうして占領された～」。▼２０１７年BS1スペシャル「父を探して～日系オランダ人 終わらない戦争～」。▼２０２０年NHKスペシャル「世界は私たちを忘れた～追いつめられるシリア難民～」。▼２０２０年NHKBS1「レバノンからのSOS～コロナ禍 追いつめられるシリア難民～」等。以上の作品で数々の作品賞を受賞。２００７年度 放送ウーマン賞。２０１０年、制作会社「椿プロ」を設立、現在に至る。

グランプリ 優秀賞
南海放送ラジオ報道特別番組「感染―正義とは何か―」

この番組は、新型コロナをめぐる差別をテーマにしたもので、5月30日に南海放送ラジオで放送された。２０２０年3月2日、愛媛県最南端の人口およそ2万人の愛南町で、県内初となる新型コロナウイルスの感染者が確認されて以降、県内の雰囲気は一変する。直接的、間接的に感染への恐怖から根拠のない誹謗中傷や差別も拡大し、「感染者は誹謗中傷に耐えられなくなって自殺したらしい」という噂が飛び交い、感染者がその日のうちに特定されることもあった。精神科病院や高齢者施設でクラスターが発生すると、「こんな施設閉めてしまえ」という声も出るなど、ウイルスの感染スピードを遥かに超える速さで、誹謗中傷などの人権侵害が拡散していく。

愛媛県内で起こった複数の問題を起点に、約１００年前の四国お遍路さんに対する感染症差別やハンセン病患者の過去の歴史を紐解きながら、差別と感染症のつながりを深く掘り下げていく。新型コロナウイルスの本当の恐ろしさは、ウイルス自体だけではなく、人間が人間の思考を失うことである。人権侵害は、それぞれの「正義」に基づいて広がる。本来は人を守るはずの「正義」が、人を攻撃していく。

この緊急特番は、丁寧な取材をもとに、感染症に怯える人間の闇の部分を描き、新型コロナウイルスから人の「正義」とは何かを問う、ラジオドキュメンタリーの傑作となった。

放送日：２０２０年5月30日（土）、山内孝雄（企画・統括）、植田竜一（ディレクター・取材）、中武正和（取材）、永野彰子（ナレーション）

グランプリ 優秀賞
人生最高の贈りもの

東京で一人暮らしをする父（寺尾聰）のもとに、長野で夫（向井理）と暮らしている筈の一人娘（石原さとみ）が突然帰ってきた。帰省の理由も、いつまでとの時期も言わずに…。戸惑う父は娘の真意を掴めない。実は、娘は、余命わずかと宣告された残りの人生を、夫と父、それぞれと過ごそうとしていた。

娘と父のぎこちない関係は、二人の俳優の名演で微笑ましく楽しく描かれる。多くの食事と料理のシーンは、平和に続く日常性を想起させるが、永遠に続く日常などはどこにもない。必ず来る日常性の終わりが絶えず忍び込んでいる。温かさや優しさの奥に静かな悲しみがある。大事件や激しい波瀾万丈のドラマ展開はなくても、人間の心の機微に優しく触れていく人間の繋がりが伝わってくる。

番組のラスト、別れは必ず訪れる。長野に向

から娘は、『大丈夫』という言葉に万感を込めて明るく元気に父と別れる。滲み出る石原さとみの涙は美しい。

最近は少なくなったが、日本のホームドラマの温かい心髄を思い起させる作品である。石橋冠演出、岡田惠和脚本、八木康夫プロデューサー、テレビドラマの達人たちと、そのスタッフの努力、更に実現困難な、この種の企画を制作放送したテレビ東京、ホリプロの英断も含めて、称賛したい。

放送日：２０２１年1月4日（月）「新春ドラマスペシャル」、制作放送：テレビ東京

脚本：岡田惠和、プロデューサー：中川順平、田淵俊彦、八木康夫（オッティモ）、平部隆明（ホリプロ）、演出：石橋　冠

グランプリ　優秀賞

ワタシたちは　ガイジンじゃない！

１００年前、新しい天地を求めブラジルに渡った日系ブラジル人の3世4世たちが、30年前、バブル期の労働力を海外に求める日本の要請で祖国に戻り、定住を始めた。以来、彼らは経済の荒波に翻弄され、日本社会から、時には差別切り捨ての対象にされるなどの辛酸をなめてきた。

〈ものづくり中部〉の中心地名古屋は、東京に次いで外国人労働者が多く、在日ブラジル人も多く定住する。彼らが描く夢と厳しい現実を継続取材し、多くの番組を制作してきたNHK名古屋放送局は、今回、彼らが住む団地に俄か舞台を設け、宮藤官九郎の脚本で、イッセー尾形が彼らの30年間のドラマを一人芝居の形で演じ、それを団地のブラジル人自身が観覧するという、ユニークな中継スタイルの番組を制作した。

慣れぬ祖国に戸惑いながら、懸命に馴染もうとする団地の生活、職を失い孤独死する男の独白など、演じられる一人芝居と、それを見る団地のブラジル人の表情から、「ガイジンじゃなく同じニンゲンじゃないか」という、彼らの心の叫びが聞こえる。コロナ禍の中で、弱者にこそしわ寄せがいく、現代の病巣にまで繋げて見せてくれる番組であった。

これまでの取材の深さに加え、この番組スタイルを着想したドキュメンタリー、ドラマ双方の〈垣根を超えた制作者の知恵の交換〉と、宮藤官九郎とイッセー尾形という二人の才能を結び付けた〈新しいテレビを目指す努力〉を称賛したい。

放送日：２０２０年12月29日、放送：ＮＨＫＢＳ１、制作：ＮＨＫ名古屋放送局

制作統括：板垣淑子、三鬼一希、取材：植村優香、演出：川上　剛、脚本：宮藤官九郎、出演：イッセー尾形ほか

グランプリ　特別賞

市村　元

市村　元（はじめ）氏は、村木良彦氏から引きつぎ、13年という長きにわたり「地方の時代」映像祭のプロデューサーを務めてきた。１９８０年川崎市で始まった「地方の時代」映像は、２００７年から大阪吹田市の関西大学を会場に開かれている。放送局、ケーブルテレビ、市民・学生、高校生の４つの部門に分かれ、地域的にも年齢的にも実に幅広く日本の映像文化の発展に寄与してきた。

市村プロデューサーの仕事は資金集めから、作品募集、３００点を越える番組審査・贈呈式の段取り、およそ10日間に及ぶ一般公開・シンポジウムの開催、その記録のまとめ・報告書作りと実に多方面にわたり、まさに放送事業の総合的な力量が必要とされるものである。

ＴＢＳ時代は、パリ支局長、「ニュース23」「報道特集」のプロデューサーとして、テレビユー福島常務取締役という地方局経営者として幅広い人脈を築き、現職の関西大学客員教授としては若い世代の育成に大きな力を発揮してきた彼の幅広い経歴は、そのまま「地方の時代」映像祭に遺憾無く生かされている。

「地方の時代」映像祭が昨秋第40回を迎えてなお、その規模・内容を維持し発展させているのは、プロデューサー市村氏の並々ならぬ熱意と持続力、そして放送人としての豊富な経験と類い稀なる能力によるものである。

〈経歴〉

ＴＢＳ報道局記者、パリ支局長を経て、「ニュース２３」担当部長、「報道特集」プロデューサーを歴任。その後テレビユー福島常務取締役。２００９年から、「地方の時代」映像祭プロデューサー、関西大学客員教授。

グランプリ　特別賞

ＮＨＫ東日本大震災プロジェクト

震災直後に組織横断的プロジェクトとして発足した『ＮＨＫ東日本大震災プロジェクト』は、幅広い視野で震災に向き合い、被災地の復興支援を目指して10年にわたり継続的に活動してきた。被災地を忘れないための放送、被災地に笑顔を届けるイベントのほか、全国の人々と被災地をつなげるキャンペーンや、世界に震災後の日本を伝える取り組み、さらには震災を記録し将来の防災を考える企画など、その活動はまさに公共放送としての真価を発揮するものである。

毎週日曜朝の「明日へ　つなげよう」。レギュラーシリーズ『証言記録　東日本大震災（97回）』、『ふるさとグングン！』、『サンドイッチマンの東北酒場で逢いましょう』のほか様々なテーマやジャンルで制作、東北を始め大阪や熊本など地方局も参加し、およそ３７０本を放送。月～木5分の「あの日　わたしは～証言記録 東日本大震災～」は、２０１２年1月に第1回を放送後、およそ１、１００本を放送した。「復興支援ソング『花は咲く』キャンペーン」では、著作権者の厚意で2億9千７００万円余を義援金として被災地に届けている。また、『こころフォト』プロジェクト」や、ＡＴＰ加盟各社制作の『未来への手紙』シリーズ」。また、事業と連携した「大型イベント『公開復興サポート』」では人気番組の公開収録や展示を16回開催し、のべ11万人近い来場者となり、地元の皆さんに楽しんでいただくと共に、開催地の魅力を全国に発信してきた。

この大きく豊かなプロジェクトの活動と、それを支えたスタッフ、事務局の皆さんすべてに、敬意を表して『グランプリ特別賞』を贈りたい。

〈関連部局・団体〉

東日本大震災プロジェクト事務局、放送総局、視聴者総局、地方局などの各部局、ＮＨＫエンタープライズ、ＮＨＫエデュケーショナル、グローバルメディアサービスなど関連団体、各制作プロダクション団体。

第7回大山勝美賞（２０２１）

当会設立時のメンバーで、2代目会長を務められ、放送のために尽くされた、大山勝美さんの名を残し、その意思を継ぐために、ドラマの若いクリエーターを個人で表彰。

新井　順子（あらい　じゅんこ）

（プロデューサー・ＴＢＳ ＳＰＡＲＫＬ）

新井順子さんは２０１３年「夜行観覧車」以来、「Ｎのために」「アンナチュラル」「わたし定時で帰ります。」など話題作を次々と制作、２０１８年に制作した「Ａではない君と」では東京ドラマアウォード・グランプリを受賞している。

とりわけ昨年制作された「ＭＩＵ４０４」は評価が高い。エンターテイメント性は言うまでもなく、ブラック企業、外国人技能実習生、社会から疎外された若者など、様々な社会問題をストーリーに巧みに取り入れ、観るものに問題提起している。

彼女の真摯な仕事ぶりから、原作者、脚本家からの信頼も厚く、これからも大いに活躍が期待される。

大根　仁（おおね　ひとし）

（演出家・オフィスクレッシェンド）

大根仁氏はテレビ東京を中心にして、「まほろ駅前番外地」などの深夜ドラマを手がけてきた。脚本・演出を兼ねることが多い。２０１０年には「モテキ」をヒットさせ、この映画化で監督デビューを果たした。都会的な映像感覚とともにギャグのセンスも併せ持ち、若い世代に強く支持されてきた。２０１９年のＮＨＫ大河ドラマ「いだてん」では外部から初めて演出陣に招かれ、２０２０年には異色のラブコメディー「共演ＮＧ」（テレビ東京）が話題を集めた。視聴者層を広げたこうした活躍ぶりを評価したい。

2021年度放送人の会総会

開催日時　令和３年５月15日
午後１時から午後１時45分
開催場所　東京都千代田区紀尾井町１の１
千代田放送会館
出席社員数
総社員数　２２６名　出席社員数　１６５名
内訳　本人出席　２８名
委任状出席　１３７名
総社員の議決権数　２２６個
出席社員の議決権数　１６５個
議　長　会長　今野　勉
出席役員
会長　今野　勉、副会長　前川英樹
理事　石橋映里、伊藤雅浩、小川和之、加賀美幸子、工藤英博、柏木登、新山賢治、菅野高至、鈴木嘉一、深尾隆一、三原　治、矢島良彰、吉田賢策　（15名）
監事　河野尚行、木原　毅　（２名）

［議事の経過の要領及び結果］

議長は、開会を宣し、上記のとおり定足数にたる社員の出席があったので、本総会は適法に成立した旨を述べた。

議長は本総会開会に当たり、第８期事業全体の総括を行った。

（監査報告）

議案の審議に先立って監事　河野尚行より、監査報告書記載のとおり第８期事業報告及び計算書類、並びに本総会で審議される事項に関して提出された報告書類は適法かつ正確であることを認める旨の報告があった。

（報告事項）

第８期事業報告の件

事務局より、第８期（令和２年４月１日から令和３年３月３１日まで）における、当法人の事業の状況につき詳細な報告があった。

第８期（２０２０年度）事業報告

【事業】

１、『名作の舞台裏』（放送番組センターと共催）第50回「未解決事件File.07警察庁長官狙撃事件」（ＮＨＫ）
２、『人気番組メモリー』…「笑点」…未実施
３、『放送人の世界〜人と作品〜』＋『ドキュメンタリーワールド』…未実施
４、『放送人グランプリ』　第19回放送人グランプリ各賞及び第６回大山勝美賞の贈賞
５、『放送人の証言・収録』中尾幸男、橋本佳子、曽根英二、長山節子、菅原正豊の各氏（計５名）
６、『放送人の証言　出版プロジェクト』…東京大学と共同企画中
７、『ラジオプロジェクト』ラジオ「聞き酒」の会の実施（11月3日、12月12日）
８、『情報交換交流』…今期はコロナ禍のため未実施
９、『放送人句会』　第81回（10月5日）の開催。

【広報】

１、『会報の発行』…コロナ禍の影響で会の活動が停滞し、会報の発行は3回。
①　２０２０年６月27日（総会報告、特集：放送人グランプリ）
②　２０２０年10月30日（特集：放送人の証言、パンデミック）
③　２０２１年２月10日（年頭所感、放送人グランプリ、下馬評座談会、特集：祝今野勉さん・文化功労者顕彰）
２、『ホームページ』…適宜更新
３、『フェイスブック』…有効活用の検討

【総務】

１、『会議の開催』…総会・理事会ほか各種会議の設定および運営
２、『経理業務』…予算・決算他日常の会計業務
３、『会議資料作成・管理』…各種会議の資料及び管理業務
４、『補助金申請』…放送文化基金など
５、『総務一般』…その他、各プロジェクトの後方支援を含む日常的な事務

（決議事項）

第１号議案　第８期計算書類承認の件

事務局より、令和３年３月３１日現在の財産目録、貸借対照表、正味財産増減計算書並びに個別注記表について詳細に説明がなされた。議長がその賛否を議場に諮ったところ、本議案は満場一致をもって原案どおり承認可決された。

第２号議案
理事及び監事改選の件

議長は、本社員総会の終結のときをもって理事及び監事全員が任期満了となるので、その改選について理事会で承認された左記の理事候補及び監事候補について議場に諮ったところ、満場一致をもって承認された。

なお、被選任者は、いずれもその就任を承諾した。

記（〇は新任）

〇青木 裕子、石橋映里、石橋　冠、伊藤雅浩、小川和之、加賀美幸子、柏木　登、金平茂紀、〇木原　毅、

工藤英博、隈部紀生、小池勝次郎、近藤邦勝、今野 勉、新山賢治、菅野高至
鈴木典之、曽根英二、田中秋夫、千葉邦彦
○中崎清栄、鈴木嘉一、永田俊和
西村与志木、林 健嗣、深尾隆一
逸見（本名藤田）京子、三原 治、前川英樹
村上雅通、八木康夫、矢島良彰、吉田賢策
渡辺紘史（３４名）

監事 河野尚行、○長井 展光

特別顧問吉村育夫（職業名松尾 羊一）は、委嘱趣旨に沿って引き続き現職を継続することになった。

尚、本総会を以て、堀川 厚敦（職業名 堀川とんこう） 河邑厚徳 佐々木 彰 北村 充史の各氏は理事を退任することになった。

【新任役員のプロフィール】

木原毅 １７５５年生。ＴＢＳラジオでおもに現場を走り回っていたが、最後のほうでデジタル系のいわゆるＩＴに関わった。放送人の会の監事を２０１９年から2年勤め、今回理事に転じた。

青木裕子 １９５０年生。７３年ＮＨＫ入局。アナウンサー。２０１０年退職して軽井沢朗読館館長。１３年軽井沢町立図書館館長。現在同館顧問。

中﨑清栄 １９４６年生。北陸放送にアナウンサーとして入社。ラジオ制作、テレビ制作を経て、定年後テレビ金沢に転職。「田舎のコンビニ」「化学物質過敏症」などドキュメンタリーの秀作多数。

長井展光 １９５９年生。８３年、毎日放送にアナウンサーとして入社。報道記者、マニラ支局長、メディア開発部等メディア・デジタル化担当を経て現在経営戦略室エグゼクティブ。

総会後の理事会で、今野勉会長の留任、副会長に前川英樹氏、渡辺紘史氏を決定。

以上、この総会の記事は正規の体裁の文書ではない。

2019 年度・20 年度予算収支対比

科目	2020 年度	2019 年度	増減
１、経常増減の部			
⑴経常収益			
①受取年会費	2,435,000	2,630,000	195,000
②受取寄付金	224,000	158,000	66,000
受取寄付金振替額	1,513,412	4,842,183	△3,328,771
③事業収入	1,300,000	2,104,000	△804,000
放送番組センター共同事業費	600,000	1,200,000	△600,000
イベント収入	0	204,000	△ 204,000
放送人の証言	700,000	700,000	0
④雑収益			
受取利息	11	15	▽4
経常収益計	5,472,423	9,734,198	△4, 261, 775
⑵経常費用			
①事業費	1,238,152	4,245,720	△3,007,568
名作の舞台裏	125,905	507,095	△381,190
放送人の世界	0	138,011	△138,001
放送人の証言	652,900	766,741	△113,841
放送人グランプリ	383,662	1,167,669	△784,007
ラジオ・プロジェクト	20,000	50,000	△30,000
放送人句会	55,685	100,233	△44,548
日韓中ﾌｫｰﾗﾑ	0	1,515,971	△1,515,971
②一般管理費	4,516,900	5,135,749	△618,849
給料手当	1,304,650	1,619,900	△315,250
諸謝金	46,500	187,000	△140,500
事務所賃貸料	879,084	871,092	7,992
通信費	366,312	327,710	38,602
旅費交通費	300,232	566,552	△266,320
会議費	247,650	33,320	214,330
印刷費	262,732	216,558	46,174
広告宣伝費	280,533	340,753	△60,220
消耗品費	350,093	441,208	△91,115
交際費	6,600	30,000	△23,400
支払手数料等	37,520	38,267	1,253
支払報酬	427,773	464,032	△36,259
雑費	7,221	1,357	5,864
経常費用計	5,755,052	9,381,469	△3,626,417
当期経常増減額	△282,629	352,729	△635,358

ラジオのページ

メディア激変の時代に思うこと

田中秋夫

コロナ禍で自粛生活を強いられていた４月上旬、講談社「週刊現代」の編集スタッフから連絡があり、５月１・８日合併号で１９７０年代に文化放送で深夜帯で放送していた「セイ！ヤング」をテーマに取り上げ、語り合う企画を予定しているが、その座談会に参加してほしいとのことだった。

説明によれば、そのシリーズ企画「熱討スタジアム」は時代を変えた出来ごとや、一世を風靡した名曲、伝説的に話題になったＴＶ・ラジオ番組等をテーマに、当時その中心にいた人々に語り合ってもらい、読者に懐かしんでもらおうという趣旨で始まり、次の回で３９６回を数える。過去にはＴＶドラマ「金曜日の妻たちへ」や、「時代」を歌った中島みゆき、「安奈」を歌った甲斐よしひろ等が取り上げられ、その関係者が語ったとのことだった。

今回の鼎談の顔ぶれは元文化放送アナウンサーで「セイ！ヤング」のパーソナリティも勤めた吉田照美氏、その番組の機関誌「セイ！ヤング・ビレッジ」の編集を手掛け、後にフリーライターとなった田家秀樹氏とのことだった。私は当時、若くしてその番組のチーフＤとして奮闘していた記憶があり、参加することにした。

座談会はコロナ禍の為、リモート形式で行われたが、「セイ！ヤング」の話題を中心に当時、リスナーの中心だった受験生の団塊世代に支えられた「深夜放送ブーム」時代を回顧することになった。あの時代、ラジオの深夜帯は

「解放区」と呼ばれ、自由な空気に満ちていた。高田渡の「自衛隊に入ろう」等、民放連の指示した要注意歌謡曲制度（放送禁止歌制度）を無視して敢てオンエアーしたエピソード等を披露した。

座談会の詳しい内容は本誌に譲るとして、私は座談会の最後に「最近のメディアは、政治にも芸能界にも忖度ばかりしている。テレビはもう忖度に染まってしまったけれどラジオはこれからも自由な場であってほしい。『セイ！ヤング』という抵抗の拠点があったことを、今だからこそ思い出してもらいたい。」と結んだ。

現状のラジオ各局が経済的な苦境にありながら頑張っている様子を見てエールを送りたいと思っての発言だった。

それにしても気になっていたのは「週刊現代」の最近の巻頭特集記事のほうで「老後生活・終活関連特集記事」のオン・パレードになっていることだった。

その理由について元同誌の編集長元木昌彦氏が「雑誌は読者と共に年をとっていく。団塊世代と共に成長してきた週刊誌は団塊世代が引退すると同時に勢いが衰えてきた。総合週刊誌というジャンルは寿命を終えようとしているのかもしれない。」とネット上で語っている。

つまり、かつて数々のスクープ記事で総合週刊誌の売り上げランクのＴＯＰに輝いていた同誌も団塊世代が終活年齢になった結果、彼等と運命を共にしつつあり、今や存亡の危機に直面しているというのだ。

「熱討スタジアム」企画も団塊世代を繋ぎとめる為に、彼等にとっての懐かしい出来ごとをテーマに取り上げてシリーズ企画としているのだと思われる。

「セイ！ヤング」座談会が掲載された同じ号の誌面にもう1本気になる記事が掲載されていた。「最近テレビがつまらなくなった理由」とのタイトルの記事である。

その記事のリードには「情報番組では鬱陶しいコメンテーターが延々と同じ話を繰り返す。バラエティは幼稚で見ていられない。ドラマもまるで学芸会で、見る番組がなくなった」とある。さらに「チャンネルを回しても『これだ』と言う番組が見つからない。テレビ番組は日に日に退屈になっている。いい大人なら、みんな感じている本音だろう。テレビ局は今出口のない隘路に迷い込んでいる」とあり、さらに小見出しで「いたずらに不安を煽る」「叫ぶだけのスポーツ実況」「ガキに媚びるばかり」『本物』を見せてくれ」といった見出しが踊っていた。かなり同感出来る記事だった。

それにしてもインターネットの普及によって、ネット広告費が急速に伸びた半面、既存のマスメディアであるＴＶ・新聞・雑誌・ラジオはどれも広告費が減少し、苦境に喘いでいるのが実情のようだ。今後、さらにコロナ禍によって「緊急事態宣言」の延長が繰り返され、経済が収縮していくことは確実になっている。

マスメディアが「マスゴミ」と呼ばれる一方、ネット上では個人的な誹謗中傷が飛び交い、「炎上」が頻発する事態が生じている。トランプがＳＮＳで支持者たちに訴え、議会が占拠されたように、ネット上では混沌とした言論空間が広がりつつある。

果たしてこれからの時代に人々のコミュニケーションはどんな展開を見せるのか？その行く末を見たいものである。

（放送人の会・理事）

「ロンバケ」を聞いて　鴨下さんを想う

木原　毅

3月21日の深夜（暦日では22日）午前1時半から90分、ニッポン放送で大滝詠一の特番が放送された。申し訳ないが僕が聴いたのはｒａｄｉｋｏのタイムフリーで翌日月曜の昼。改めて驚いたのは特番が生放送だったこと。進行を担当した上柳昌彦アナはなんとこの2時間後に早朝のレギュラー番組も担当していたのだ！しかも内容は音楽番組としてもドュメンタリーとしても、上質のものだった。

ところでその特番のタイトルは『発売４０周年記念特別番組　インタビュー・ア・ロング・バケイション　大滝詠一「Ａ　Ｌｏｎｇ　Ｖａｃａｔｉｏｎ」ができるまで』。（ちなみに本人の名義は歌手としては大滝、作家としては大瀧を微妙に使い分けていたが、ここは特番のタイトルに従って大滝で統一する）

レコード会社の担当ディレクターや原盤を制作した音楽出版界のレジェンド・朝妻一郎、もちろん作詞を担当した盟友・松本隆らの貴重な証言を体系的に聴くことができたばかりではなく、そのバックグラウンドとなった当時の日本の音楽業界の状況まで丁寧に解き明かしてくれたのは有難かった。

タイトルが示すとおり、大滝のアルバム「ロンバケ」が発売されたのが１９８１年の3月21日、上柳アナが入社したのはまさにその年の春のこと。　歳の彼が力むこともなく自らの放送人歴に重ねながら廻していくスタイルは、実に気持ちのいいものだった。

松本隆と担当ディレクターの白井隆三によって明らかにされた代表曲「君は天然色」の誕生秘話も聴き応えがあった。松本の実妹の死がこの歌詞の裏にあったとは。

そもそも番組企画の発端は４０周年を記念してのレコード再発売とアップルミュージックでの配信開始などに因んだものでもあったのだがプロモーションっぽさを感じさせなかった。大げさに言わせてもらえば音楽史に残すべきアーカイブになったのではないか。

この番組を聴きながら、少し前に亡くなったある大先輩のことをふと思い出した。その人の名は鴨下信一である。

いまから四半世紀前、偶然が重なって僕は鴨下さんとたまた同じフロアで働くことになった。鴨下さんはラジオ担当の常務として（ＴＶ演出の仕事も掛け持っていた）、僕は玉突き的な人事異動で営業のデスクとしてである。段ボール箱に引っ越し荷物を詰めて台車で新しい職場に向かおうとしていたときのこと。乱雑に詰め込んだ段ボール箱のいちばん上には、たまたま社内の同僚に貸して戻ってきたばかりのビデオソフトが一本載っていた。大滝詠一監修の「クレージーキャッツデラックス」（クレージー映画の歌とコントのアンソロジーで、１９８６年に東宝ビデオから発売された）。鴨下さんは、おやっという顔をしてビデオをつまみあげると、箱に記載されていたスタッフのクレジットを指さして「これ、俺だよ」といたずらっぽく微笑んだのだった。

聞けば東宝から相談され、構成者として参加したとのこと。牧野敦という名義だったが、そのペンネームは亡くなられた元巨人軍コーチ牧野茂さんからお借りしたものだそうだ。

そういえば鴨下さんは１９８２年にＴＢＳ月曜ロードショー枠で放送した『エノケンからたのきんまで　東宝映画の五〇年』という実に楽しい特番を編集・構成したことがあった。（このあたりのいきさつもちゃんと聞いておけばよかったなぁ。）

楽曲編集に凝りに凝った大滝詠一と、映像編集の達人・鴨下信一の二人が東宝の編集室で膨大なフィルムを前にしてどんな話をした

んだろうか。いつか詳しく聞かねばと思いながら・・・。二人の異才を偲びながら、久しぶりに「ロンバケ」に針を落として思いを巡らせた春の日だった。

音楽評論家活動50周年に寄せて

富澤一誠

私は今年の4月27日に70歳になりました。そして音楽評論家活動50周年を迎えます。音楽評論家としての私の正式なデビューは1971年10月25日発売の音楽雑誌「新譜ジャーナル」（11月号）でした。私にとっての処女評論「俺らいちぬけたくないよ　岡林さん」が掲載されたのです。

「私の音楽論」という読者の投稿ページに掲載された私の評論に対し、編集部宛てに読者から賛否両論、たくさんのハガキが寄せられました。予想外の反響に編集部は色めきたったという話です。若い音楽の書き手がいなかったので、その後、私が重宝がられることになります。その意味ではきわめてラッキーなスターだったと言えるでしょう。

71年から91年までの20年間、私は音楽評論家として、雑誌、新聞、単行本と「書く」ことに徹底してきました。その間に40冊単行本を書いたほどです。

92年からはラジオ・パーソナリティーとして「しゃべる」ことを始めました。「JAPANESE DREAM」（FM NACK5）を立ち上げたからです。そして97年からはテレビ番組のレギュラーを持ったので、テレビ・コメンテーターとしての顔を持ちました。「音楽通信」（テレビ東京）、「Mの黙示録」（テレビ朝日）で週に2回は画面に顔を出すことになります。

2000年から02年にかけて私は多忙の極みにいました。「JAPANESE DREAM」、「音楽通信」、「Mの黙示録」という3本のテレビ・ラジオ番組を掛け持ちしていたからです。加えて、書き手としてもかなりの数の連載物をかかえていました。そんな訳で多忙でありましたが充実もしていました。なぜならば、いい曲は売れてあたりまえ、いいアーティストは売れてあたりまえ、という理想のミュージック・シーンを創造するための効果的な「武器」をようやく持つことができたからです。

2000年に入るとミュージック・シーンの状況も変わりつつありました。いくら耳を立てても、私にリアリティーのある歌が聴こえないのです。そこで私は自分のシフトを変えることにしました。

「演歌・歌謡曲」でもない。「Jポップ」でもない。大人の良質な歌を「Age Free Music」と名づけ、それを旗印に掲げると同時に、私は自分が担当するラジオ、テレビ番組を全て「Age Free Music」にシフトを変えました。

18年4月、私は尚美学園大学の副学長に就任しました。50年間にわたって実社会で音楽評論家として活動して得た知識や経験を次の世代へ継承していくつもりです。そのために、授業で学生とコミュニケーションを取り、「実学」を教えることで、音楽業界で活躍できる人材を育成したいと思っています。あと何年できるかわかりませんが、志を持って「使命」を全うしたいと思います。

（音楽評論家・尚美学園大学副学長）

第50回　名作の舞台裏

NHKスペシャル未解決事件　File・07

警察庁長官狙撃事件

実録ドラマ「容疑者Nと刑事の15年」

日時　3月7日（日）13時半～16時半

場所　横浜市市民文化会館　関内ホール（小ホール）

ゲスト　国村　隼（出演）
イッセー尾形（出演）
中村直文（制作）
黒崎　博（脚本・演出）

司会　渡辺紘史（放送人の会）

NHKスペシャル「未解決事件」は日本中に大きな衝撃を与えた事件をドキュメンタリーと実録ドラマで徹底検証するシリーズ。

警察庁長官狙撃事件は1995年3月30日、地下鉄サリン事件の10日後に荒川区南千住の国松孝次長官の自宅マンションを長官が出たところで発生した。付近で待ち伏せていた犯人は拳銃を4回発砲。長官はそのうち3発を腹部などに受け一命はとりとめたが瀕死の重傷を負った。

狙撃から1時間後、テレビ朝日に電話がかかり、次の狙撃目標をあげ、オウム教団への捜査を止めるよう脅迫したが、教団は関与を否定。一方、オウムの信者の警視庁巡査長が犯行の具体的な状況や、拳銃を神田川に捨てたことを供述したが、拳銃は見つからず不起訴。2008年、オウムと無関係の男、中村泰が強盗殺人未遂で逮捕され、狙撃事件の犯行を示唆したが、決定的な証拠がなく、不起訴。2010年3月、殺人未遂罪の公訴時効を迎えた。

Nスペ「未解決事件」はドキュメンタリーと実録ドラマの2部構成だが、今回の「名作の舞台裏」では、実録ドラマの90分を上映。その後、ゲストによるトークを行った。

司会　渡辺紘史　まず、3年ぶりにご覧になったこの作品のご感想をそれぞれに伺いましょう。

司会・渡辺紘史氏

中村直文　未解決事件シリーズはこれで7回目です。今回あらためて見て、ドキュメンタリーとドラマの相乗効果を感じました。国村さんイッセー尾形さんの演技に圧倒されておりました。

黒崎博　このテーマで取材を進めていたとき、プロデューサーの中村さんと、一緒に取材していたディレクターの小口くんに「このテーマでドラマを書かないか」と薦められ、このチームに飛び込みました。容疑者の中村泰が所持していた物を保管している場所がNHKの倉庫にあり、段ボール箱8個の中にガスマスクや偽造の免許証などがいっぱい詰まっていました。初めてこの箱を開けたとき、とんでもないプロジェクトが始まったと恐ろしい気がしましたが、一方でドラマにしたいという強い気持ちも生まれました。先ほどドラマを見て、国村さんとイッセー尾形さんに出演依頼をした時の緊張感を思い出していました。この二人に出ていただいて、あらためて「この二人しかなかった」と思った次第です。

イッセー尾形　久々に見てこれに関わった方

の力を感じました。クォリティーは非常に高い。結集された力に圧倒されました。国村さんとのやりとりは「これからどうなるのだろう?それに対するやり方は?」と見ておりました。覚えてはいるのですが、ドキュメンタリーからドラマの切れ目に気づかないですーっと見入っていました。私の感想では中村泰は監獄が好きなんだなあ。彼の言うことを全部合わせると「あんたずっとそこに居たいのね。私にはそうとしか思えない」。これが私の結論です。

国村隼　とんでもなく密度の濃いドラマです。私は私と尾形さんのやりとりを実感のドラマと感じておりました。次はこうなるだろうと考えているとその通りになる。こんなやり方もあるのだと不思議な感覚でした。ドキュメンタリーの二人の取調室のシーンと私と尾形さんがオーバーラップしていましたが、私は尾形ワールドの観客だったのだと思います。

国村　隼氏

司会　渡辺　この未解決事件シリーズは最初からドキュメンタリーとドラマの2部構成ですがその狙いは?

中村　この番組がスタートしたのは10年前ですが、当時報道の現場で仕事をしていて、夜討ち朝駆けなど取材の膨大なメモがあります。その一部は放送されますが、放送されない余白というか、無念の思い、上司の悪口などニュースにならない事件の相があり、それを何とかしたい。しかし、そこには映像はない。それで、ドキュメンタリーとドラマの二つの力を利用して複雑な事件を描くことが出来ないか、とやってみました。

渡辺　最初は座談会と事件を追ってのニュースをドラマにする形だった。今回初めて、ドキュメンタリーとドラマの両面から事件を立体的に追及する企画になって黒崎さんが登場した。

黒崎　ドラマとドキュメンタリーの両面から事件を明らかにしようという企画の前に、膨大な事件の資料があり、それを解き明かすことができないまま時効を迎えようとしている。そのことにたいする記者たちの凄い無念さがある。テレビ局には報道というセクションと制作というドラマやドキュメンタリーを作るセクションがある。私は制作ですが、報道の資料をみると記者たちがいろいろもがいた跡がある。執念や怨念が積み重なっている。それを一つの番組にしていというのがスタートでした。しかし、現実のファクトがいっぱい詰まっているものに対して一体何ができるだろうと考え、そのとき見つかったのが「取調室にカメラを置く」ということでした。アメリカでは取調室にカメラがあることがしばしばで、それをまとめて番組にしています。日本ではない。この事件の場合は全くなく、記録だけが残っている。ここにカメラを持ち込めたら、何か大事なものが見えてくるかもしれない。それができるならドラマにする価値があると思った。それが最初です。

渡辺　取材は報道の人と一緒にやった?

黒崎　そうです。報道にはこれまで10年積み重ねてきた資料があり、ドキュメンタリーを担当した小口ディレクターを初め数々のディレクターと一緒に取材し、ここに登場する人物はいまも現存する人たちで、勿論取材しました。

渡辺　キャスティングはいつ頃決めたのですか?脚本を書く前、書き終えてから?

黒崎　ドラマによっていろんなケースがありますが、今回は1行も書いていない段階で国村さんとイッセー尾形さんに出演依頼の電話をしました。漠然とした概念だけがあって、お二人には1枚の紙にそれを書きながら説明しました。

渡辺　あてこんで書いた部分もあるが、そうでない部分もある?

黒崎　先ほどドラマを見て思ったのですが、あの場面で脚本はあるのですが、実は中村が何を喋るか全く予測できない。脚本の台詞を忘れているのでなく、次に何を喋るか予測できない芝居になっている。それに対して原刑事がどういうリアクションをして、どこで大きな声を出すか、どこで残念な顔をするか全く予測できない。不思議な感覚です。

渡辺　つまり、二人の間に化学変化が起きていた。

黒崎　そうです。恐らく全部のシーンに化学変化が起きていたのだと思います。

—映像・最初の取調室のシーン—

原一雄刑事　腰ですか?体調はどう?

中村　体調は何とかしなきゃ。プロとして、体調を維持できなければ、即、死を意味しますからね。

原　何のプロ?

中村　革命家です。私の天職です。私にも声をあげる権利はあるでしょう。

原　姓名と生年月日は?

中村　ナカムラヒロシ。昭和5年4月24日生まれ。

原　昭和31年の裁判記録ではヤスシとなっています。

中村　ヒロシです。5年前から変えました。

原　何故名前を変えたのですか?

中村　戸籍には読み方は記載されていないんですよ。どう読もうと個人の自由なんですよ。

原　警察が押収した銃は38口径レボルバー3挺、九九式4挺、コルト25、…　見事なコレクションだ。

中村　まあ、これでも半分以下でしょう。それから、コレクションではないです。実戦を想定して集めたものです。

原　どんな実戦を想定していたのですか?銀行を襲うとか…

中村　北朝鮮の拉致被害者の救出が目的でした。拉致事件以前からこの事実を私は掴んでいました。そしてこつこつ集めました。

あんた、銃で人を撃ったことがありますか?あったら、一発の銃弾の持つ力をご存知でしょう。銃弾は世界を変え得るのです。

原　1995年3月30日、警察庁長官が狙撃されましたが、これもあなたが?

中村　それについては否定も肯定もしません。

原　明確に否定はしないということですか?

中村　それでいいです。お任せします。

残念ながら、あなたの経歴に未解決事件がもう一つ加わるようですね。

—映像、終

渡辺　「お前やったんだろう!吐け!」というのではなく、お互い人間の探り合いで、「こいつ何者なのかな」というのが取り調べなのだと思いました。

撮っていて予期しないことがありましたか?

黒崎　これは、撮り始めのごく初期で、まさに

自己紹介から始まっています。普通ドラマではこんなシーンは要りません。それこそ「バカヤロー！吐け！」なのでしょうが、この二人は、撮り始めると、これからどうなるのだろうと、非常にスリリングで、初対面のシーンから始めました。国村さんとイッセーさんでなければこんな入り方にはならなかったでしょう。ぽんと内容が入ってきてつながる。

　余計なことのような話をしますと、取調室の机は壁にくっつけて置くことはないのです。ドラマでは普通部屋の真ん中に机を置き、画の中に窓が入るようにします。その方が照明がコントロールできて面白い画が作れるからです。しかし、警察の人に話を聞くと実際は狭い、窓の無い部屋でやったという。馬鹿正直にそれを再現しました。それ以外に大阪の拘置所の取調室も出てきますが、全部実際に即して、美術のセットのセオリーには反しています。それでもこの二人のシーンがみていられるのは国村さんイッセーさんの緊張感がずっと続いたからです。とても変わった撮り方でした。そんな

渡辺　最初は腰の話からですが、囲碁の話に将棋の話で答えるような、ちぐはぐがある。相手の懐で何かをききだしてやろうとか、何か想い出すことはありますか？

国村　このシーンを見て思い出していました。シチュエーションも、台詞もわかっているのですが、イッセーさんが入って来ると「あ、中村さんだ」と、さしで向き合う。それを客観的に見ている自分というのが二重構造としてあって、そうしてみているとイッセーさんは台本にある通りの予定調和としての人物ではなく、とんでもない中村さんとして出てくるんですね。それが続くと私はイッセーさん劇場の一観客になっていて、それが中村との関係性に繋がっている。イッセーさんをずっと見ていて「何しはるねん」と思いながら、面白くなります。最初にこうして出会って、その関係がずっと続いていた。

渡辺　イッセーさん、この関係は、芝居で、相対しながら変わって行くものですか？

尾形　いや、何時怒り出すか、「いい加減にしろよ。イッセー、ちゃんと芝居しろよ」と言われるかと思っていて…

国村　そんなことないよ。

尾形　芝居によっては、大体こんな芝居かなと思うことがありますが、この芝居は1センチ1センチやって行かないとわからない芝居です。

イッセー尾形氏

国村　そうですね。

尾形　中村は体幹がいいだろうと推測しました。人を銃で撃つのですから体幹がしっかりしているはずだ。それで最初に腰の話です。中村には独特の口調があります。中村がどこかに苦情を入れた電話の録音が残っています。それを聞きました。聞くと、苦情なのに「どうしてくれるんだ」と言わない。感情をみせない。なんだか難しい言葉ばかり連ねて行く。話が終わったのかなと思うとまた続く。起承転結がはっきりしないのです。それと顔写真がいっぱいありました。口をこんなにとがらせた顔とか。だから、顔とだらだらした口調、そして体幹の三つを後生大事にしました。国村さんはテレビで知ってる国村さんだから、「怒らないでくれよ」と願いながら進めたら黒崎さんに止められました。

　最初に、黒崎さんが「取調室にカメラを入れたら」と言ってましたが、前に私も聞いています。それは、ドラマではなく、目指しているものはドラマとドキュメンタリーを越えるものだとの印象でした。

渡辺　顔と口調と体幹ですか。国村さんの役は刑事としては複雑な感じですね。

国村　はい。私は原さん本人とお会いしました。やっぱりとらえどころのない方でした。（笑い）敏腕刑事とかいくつも功績がある流石にそうだよねといったところが見当たらない。だから、実際、尾形さんと初めてやったとき、「こいつのどこがホントでどこが嘘かを問い詰めてやろう」と思った。それをちゃんとやれば原さんが立ち現れてくるのではないか。

渡辺　アジトを提供した前島さんの奥さんのところへ訪ねるところがあります。その奥さんから今は弁当を貰っているという非常に微妙な関係があって、そこからお互いに真実を求めあう。そんな面白い展開ですね。

　取り調べはこれから何回もあって、そして逮捕されないで接見室になる。その間、敵対関係というより盟友的なものになって、公安に向かって攻撃したり、複雑でこまかい経緯があって、取り調べが進行する。最後に犯行を自白して、犯行シーンになる。それは、スタジオでイッセーさんがカメラの前に立って、衣装をつけ、自転車を転がして行くところから始まる。ここの意図を黒崎さん語ってください。

黒崎　撮っていて、楽しかったシーンの一つです。人を撃ったシーンなので、こんなことを言うと叱られますが…。実際は取調室で中村と原刑事が向き合って喋っているだけのはずですが、中村はずっと刑務所にいたので、頭の中ではいろんなところに飛び回っていたのではないかと想像しました。それをどのように映像に表現するか。このシーンについては中村プロデューサーと何度も相談しました。Nスペの「未解決事件」の枠なので、当然、事実をベースにしなくてはならない。そのなかで、このフィクショナルなことをどこまでやるかについてはドキュメンタリーのチームとも議論を重ねたところです。

　頭の中では、刑務所や取調室から飛び出して、自由にいろんなところへ行って、自分の訴えたいこと、自分がひけらかしたいことを、こうやって述べていたのかもしれない、というイメージをくみ取っていただきたかった。だから、あえて、映像はスタジオを飛び出したり、あるいは自分が生き生きと国松長官を撃った、あるいは撃ったかもしれない、それは僕らにはわからない、それを含めて、フィクショナルなこの人物の表現としてやってみようと思いました。

渡辺　中村の告白、証言は本当かどうかわからない。自作自演のフィクションかもしれない。その部分を、ドラマとドキュメンタリーの両面でやって、これはドラマなんだと、言い訳のためにやっているのかと思ったのだけど、そうではない。ドラマとしては当然だけど、中村の心理に沿って描写したのですね。やっと頷けました。

　これに対してNスペの内部はどうだったのですか？

黒崎　われわれは報道なので、こうなれば真実をつきとめたい。その意味ではこの番組は失敗で、目標に到達していない。

　われわれはずっと犯人の中村に振り回され

てきた。最初の段階でわれわれのところへ、『未解決事件』という番組があるらしいな。俺のことを取り上げろ」と手紙が来た。（笑い）だけど書いてあることは物凄い事実でほっておけない、というところでスタートしている。中村の本当かどうかわからないという人物像を描くという意味では、フィクショナルではあるが、あるリアリティーをとらえていた。逆にあそこをかちっとリアルに表現してしまうと、リアルに容疑者だと言うことになってしまう。

渡辺　事件の捜査は事実という証拠を積み重ねて真実に辿り着く。もう一つは犯人の心の中、動機、犯行の微細なデテール、それらが人間の普遍的な行動にマッチしていると合理的に判断できるかどうか、ということで自白が初めて証拠となる。その二つの捜査がある。この「未解決事件シリーズ」ではドキュメンタリーで証拠を取材し、ドラマで人間の心を追求して真実に至る。このやり方は事件を扱うのに素晴らしいやり方だと思います。

黒崎博氏

黒崎　これまでの「未解決事件シリーズ」はドラマが先にあってドキュメンタリーが後だった。ドラマで何が起こったのかをトレースするので、よりファクト性が求められた。今回それをひっくり返したので、事件のドラマ化より自由で、ある意味、ドキュメンタリーの事実の更に奥深くに何があるかをやれたと思います。

—映像　取調室・最後—

中村　原さんも本をお書きになったらどうですか？

原　私には、この事件は2回目の未解決事件として記録に残るが、真実について知りたい。

中村　あれは逆でしたね。９つの真実に１つの嘘があって何がおかしい、と言いましたが、あれ逆でしたね。この世の中に９つも本当のことなんてありゃしない。９つの嘘にまじって１つの真実がある。あんたたちがその１つの真実を見逃したとき…

原　あるんですか？１つの真実が？

中村　…

—映像終—

渡辺　最後にパネルに写った国村さんの顔で終わる。切り返さないでずっと撮っている。好きなシーンです。最初、自己紹介に始まって、いろんなやりとりがあり、盟友関係とも思われたが、得たものはほとんどなかった、という最後の顔です。

国村　ふつうはまず尾形さんをおさえて、それから私をおさえてとなる。私が写りこんでいることはわかっていましたが、あんな効果的におさえられていることはわからなかった。観客の目線で見て、「へえ」と思いました。

尾形　黒崎さんのホンでは9個の嘘と1個の真実、とありますが、1個の嘘と9個の真実かどうか、忘れちゃったんです。（笑い）今でもどっちかわからない。

　でも、中村の本質だと思いましたね。9だの1だの真実だの嘘だの、5と5とか、9とか言うかもしれない。それが自然に言えるように書かれている。

彼は、なんて寒々しい世界にいるのだろう、誰もいない世界で、現実には浮浪者と会っても浮浪者とも会わない、電車に乗っても、牢獄の独房にいるような世界です。東大に行って頭はいいのでしょうが、変の極みだなあ。

黒崎　取調室でカットを切り替えて行くとアクリル板に顔は写るんです。こんなシーンは前にも撮ったことがあり、写るのが面白くなるといいなあ、と思いながら撮りました。しかしこういうカットになるとは全く思ってなかった。二人の芝居を見て、尾形さんが出て行ってたまたま国村さんの顔が残っちゃった。照明もカメラも狙って撮っているのだけど、僕はこうなるとは思っていなかった。あれが撮れてしまったので、この物語はこれで終わるしかないなあ、と宿命的に思いました。
ドラマとしては見せて行くカットが比較的多いドラマになりましたが、それは撮影が終わって、編集室で切りたくないカットが多かった。二人のカットも切ると空気感が切れるのが怖くて、少しでも長く見せるカットにして行きたいと思いました。

渡辺　私も編集の経験はありますが、カット割りは演出者の特権で勝手に決める。しかしいまの話だと芝居をじっと見ていたいというところで照明やカメラがすーっと動いたところを捉えた。これが演出だと凄い。つまり、スタッフの思いをかきたてて作ってしまう。役者だけでなくスタッフも演出しちゃう。これは面白い話でした。

黒崎　それは、まず二人の芝居の緊張感ありきで、イッセーさんは1センチずつといいましたが、本当に1ミリずつ、二人の芝居は次が予測できない。取り逃がしたら二度と再現できない。その意味ではドキュメンタリーの現場を生で回している感じで取り逃がせない緊張感がありました。

　イッセーさんが髪を上にかきあげる。すると僕のそばにはりついていたメイクさんが（小声で）「これはなんですか？」。僕は（小声で）「分からない」（会場爆笑）。

尾形　「真実は何でしょう？」と聞かれるでしょう。で、必死に考えているんです。考えているところは切られている。

黒崎　そうなんです。現場でイッセーさんとそんな会話をしたんですが20％くらいしか理解できなくて、「やってみましょう」と…

渡辺　面白いですね。ドラマ作りは全体が化学変化を起こすんですね。

　さっき「一つの真実があるのか？」という問いかけに対してあんなリアクションでした。その答えはあるのか？それは黒崎さんの思いなのかもしれません。エンディングを見ましょう。

—映像・エンディング—

渡辺　このエンディングをどう解釈するかは止めておきましょう。これはメッセージとして皆さんに伝わればいいかなと思います。

　この事件はいまどうなっているのですか？

中村直文氏

中村　実は原刑事はこの事件をしぶとく追いかけています。時効にはなったのですが、真実を知りたい思いです。ドキュメンタリーをご

覧になった方はお分かりですが、われわれが中村氏に「証拠を出せ」と言うと「資料が埋めてある」と場所を言い、金属探知機で調べたが何も出てこなかった。警察がそれを知って「場所を教えろ」と言う。流石に中村氏との信義関係がありますから中村氏に了解を求めると中村氏は「絶対に教えない。俺を逮捕した奴に教えるもんか」と未だに獄中で恨みつらみを言っていましたが、今年の正月からとうとうやりとりが途絶えました。もしかすると体調が相当悪いのかもしれません。パーキンソンを患っていたので、もう長くないのかもしれません。

それまでは、核心のことは何も言わず、のらりくらりという状況です。それが変わらない限り事件は解決しないと思います。

渡辺　もう90歳ですね。

最後に国村さん、尾形さんお二人に伺います。お二人は実際の人物を演じておられる。緒方さんは天皇ヒロヒトまで…、そのときどんなことに気を付けていますか?

尾形　僕はまず顔かたち、リズム、口調、トーン、それを写す。それがない場合は自分でつくるしかないわけですが、残された資料から探ります。

渡辺　歴史に大きな影響を与えた人物などの場合、あまり変えると歴史の事実を変えることになるのではないか。そんなとき、これは避けたい、やっちゃいけない、と考えていることがありますか?

尾形　それは脚本の段階で、役者に指定されることかもしれない。

国村　芝居を見て下さる観客がもっている人物のイメージ、動き、喋り方ははずせないと思います。ただそこにあまり縛られたくない。お客さんにあまりはっきりしたイメージがなければ、僕はこんな風にイメージしたというキャラクターをその作品の中に出したい。しかし実在の人では、それはやり難いので、実在の人はやりたくない。

渡辺　実在の人物を扱う難しさについて黒崎さんは…

黒崎　このドラマで難しかったのはそこです。これまでの「未解決事件」での実在の人物は刑事、新聞記者、それから主人公です。このドラマでは主人公は原刑事、そして第2の主人公として容疑者Nがいるわけです。ドラマを作って行く上で、自分が感情移入できない人物を描くのは非常に難しい。中村容疑者のどこに感情移入すればいいのか。最初は全くわからなかった。作りながらこの人物を追いかけて行くのは無理なのじゃないかと何度も思った。今でもうまくいったのか、全くわからない。難しいなあと思いますが、一つだけ、ここにはあると思ったのは年齢のこと、老いるということです。歳をとって行く自分が恐ろしかったのではないか、と供述調書を読んでいて感じたことがありました。このまま何にもしないで死んで行くのがいやだ、という気持ちが老いから来ているとすれば、そこだけは1ミリだけ感情移入できる。分かるかもしれない。そこを起点に作って行こう、と思った一つです。もう一つは、供述調書を読んで行くとある種の信頼関係が生まれているような気がする。演じていただいた国村さんとイッセーさんの間にも信頼関係が生まれていると感じました。僕は「このシーンから信頼関係があるよう演じてください」なんて全く言っていません。自然に取り調べのシーンを演じて行くと、二人の仲になにかしら通じるものがある。それはなにか、僕自身が説明できないけど、そこはなにかにできるかもしれないと思った。だから非常に、淡い、脆い関係なんです。そこを起点に作って行く。微妙なバランスの上になりたっているギリギリの物語だったのかな、と思います。

渡辺　この話をきいて、ラストシーンで、88歳の彼が、こんな形で人生を終えるという思いがでていた、と今ようやくわかりました。

黒崎　最後に年齢を出したのはそのためです。この番組の放送の直後われわれはもう一度手紙を書いて「もう一度、もし、しゃべりたいことがあったら、これが最後のチャンスだと思うので聞かせて欲しい」と書きました。それに対して長い長い返事の手紙を貰いましたが、それにはやっぱり従来の主張を繰り返すだけで、何も新事実を書いてくれることはなかった。

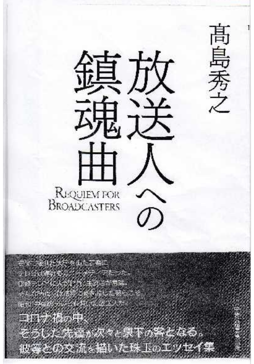
尾形　今、思い出しました。何をやっても国村さんの前にいないと落ち着かない。国村さんの前にいると意味がある。国村さんの前にいて、その座る。それが、俺が生きている一番の意味だ。他は意味ない。それは信頼関係とは違う関係かもしれない。

それと年齢、死については　中村さんも考えていると思います。誰も辿りつけないところへ辿りつける自分でありたい。拷問のように生かされているようでもあり、一言ではまとまりません。

―最後に、皆さんに今後の予定を聞いたが時期を失っているので省略―

訂正　前号・90号の11ページの下段、「下馬評座談会」の記事の写真説明に「柏木登氏」とあるのは「小川和之氏」の間違いです。また、15ページ、座談会の出席者名に「柏木登」とあるのも「小川和之」の間違いです。いずれも編集者の勘違いによるもので、まことに申し訳ありません。直ちに訂正すべきところですが、会報の発行は3～4ヶ月おきで、こんなに遅くなってしまいました。お許しください。

新刊紹介



会員高島秀之氏のエッセー集である。高島氏は「NHK特集」などドキュメンタリー、教育、教養の多数の番組を手がけ、定年後は茨城大学教授、著書も多数。そんな経歴の中で知り合った人たちのエッセーで、井上靖、平山郁夫、横澤彪、久世光彦、藤井潔、広中平祐、吉川幸次郎、桑原武夫、堀田善衛、鈴木健二、坂本朝一、島桂次、川口幹夫…、まだまだある。

中央公論事業出版刊定価2，０００円+税

新入会員紹介

塩田純（しおだじゅん）１９６０年６月生。１９８３年ＮＨＫ入局。日本・アジアの近現代史のドキュメンタリーに取り組む。２０１９年ＮＨＫ退職。現在ＮＨＫエデュケーショナル特集文化部制作主幹。

訃報

澤田隆治　5月16日没。享年88。

１９９５年ＡＢＣ（朝日放送）入社。テレビ初期のお笑い番組「スチャラカ社員」「てなもんや三度笠」などが爆発的なヒット。７４年東阪企画を設立。演芸番組以外も含め月80本以上の番組を手がけた。放送人の会の設立時からのメンバーで、会の基礎を作った一人であった。

NHKの中期経営計画（2021～23年度）等の議論について

先週開催された放送人の会の理事会において、ラジオプロジェクトから提起されたNHKのAMラジオ波の削減反対意見書について、衛星放送の削減計画も含めて総合的に議論すべきだとのご意見が多数ありました。

つきましては、理事会当日にお話が出ましたように5月26日（水曜日）15時より～17時ラジオプロジェクトメンバーおよびこれまでご意見を頂いた理事を中心に、議論を深める会議を開催しました。

《参加メンバー》

田中秋夫理事ほかラジオプロジェクトメンバー

加賀美理事　（※アイウエオ順）

柏木理事、新山理事、鈴木（嘉）理事、菅野理事、矢島理事、渡辺理事、総務委員会長ほか事務局メンバー

今野会長、河野監事（※随時参加）

《議論すべき論点》

意見書の提出について（出すべきか否、有志一同か、会としての意見書にするかなど）

意見書の内容について（AMラジオ波に限るか、衛星放送、公共放送としてのNHK経営の在り方まで踏み込むか）

今後の議論の進め方について（ワーキンググループの設置など）など

※「NHK の中期経営計画（案）」などの添付資料参照

※なお、ラジオグループの田中理事および前川総務委員長ともご相談の上、当面は、この件に関するなど事務連絡などの作業については事務局小川が担当します。

事前にご意見ご希望のある方は、事務局及び小川の自宅アドレス（kaoo@ai.wakwak.com）までお寄せ下さい。

編集後記▼ドラマを殆ど配信で観ている。CMをカットしてドラマだけを見たいと、いささかの配信料を月々払う。ふと思う。見たくないコマーシャルのために、わざわざお金を払っている、と。▼尺、内容とも、小ぶりなドラマが多くなった。正味24分程度。出演者も少ないラブストーリーが4月期首には多い。みな、恋の仕掛けに苦労している。語りを多用し、LINEで文字情報も使う。今や、恋もままならない…。▼NHKが連ドラでオリジナル脚本を4本放送。脚本家は、加藤拓也、橋部敦子、山本むつみ、渡辺あや。出来不出来はあるが、オリジナルは拍手だ。才人の劇作家加藤の「きれいのくに」は少し苦しい。▼1年余、病気休養していた脚本家の金子茂樹がパワフルに蘇った。日本テレビの「コントが始まる」。28歳以降の人生に踏み迷う、男3人と女1人。ある種の懐かしさがある。▼志良きかなと思う作品のタイトルを列挙する。メーテレ「ワンモア」、WOWOW「川のほとりで」、HULU配信「息をひそめて」。㊟▼コロナのせいでいろんなことが中止、先送りである。放送人グランプリ贈賞式、今野勉氏文化功労者顕彰のお祝い、堀川とんこう氏を偲ぶ会…、オリンピックはどうなるのだろう、こんなことを言うのを「あさっての方を向いている」と言うのだろうか。というわけで、今号はまことに半端なものになった。次号を乞ご期待である▼コロナのワクチンの1回目を接種、2回目の予約もできた。もう少し元気でいたい。（視）

会員名簿

2021.5.28 現在

【あ】藍澤幸久　相田洋　相本芳彦　青木裕子　青山悌三　秋田和典　天野證範　雨宮望　新井和子【い】池田正之　石井彰
石井ふく子　石田研一　石橋映里　石橋冠　石原信和　磯智明　板谷駿一　市岡康子　市川哲夫　市村元　伊藤博文　伊藤雅浩　井上佳子
今井義典　岩澤敏　岩瀬弥永子【う】上村忠　浮田周男　臼杵敬子【え】江川雄一　江口展之　遠藤利男　遠藤雅充
【お】大池雅光　大川光行　大沢悠里　太田昌宏　大類なぎさ　緒方陽一　岡野真紀子　岡室美奈子　岡本勉　小川治　小川和之
小河原正巳　沖野瞭　荻野慶人　尾田晶子　織田晃之祐【か】加賀美幸子　柏木登　片岡敬司　加藤滋紀　加藤拓　加藤義人　金平茂紀
川平朝清　鎌内啓子　亀谷弘美　川喜田尚　川口健一　川渕恵子　河邑厚徳【き】北川泰三　北川信　北出晃　北村美憲　北村充史
木下浩一　木原毅　木村成忠【く】工藤英博　隈部紀生　倉内均　訓覇圭　黒崎博　黒沢淳
【こ】小池勝次郎　河野尚行　小玉滋彦　後藤和晃　小山帥人　近藤邦勝　今野勉【さ】斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正　坂元良江
桜井均　桜井元　佐々木彰　佐々木光政　佐藤敦　佐藤幹夫　佐藤理恵子　佐野有利【し】重延浩　重村一　重盛政史
静永純一　柴田陽一郎　清水誠　志村一隆　下崎寛　下重暁子　下村幸子　白井博　新山賢治
【す】菅野高至　菅野嘉則　杉田成道　鈴木俊樹　鈴木典之　鈴木弘貴　鈴木芳夫　鈴木嘉一　須磨章【せ】清野豊　関佳史
せんぼんよしこ【そ】曽根英二【た】高島秀之　高田宏　竹中一夫　田澤正稔　多田健　田中昭男　田中秋夫　田中直人　田中典子
田中則広　田原茂行【ち】千葉邦彦【つ】塚原あゆ子　塚本茂　塚本幹夫　辻本昌平　土屋敏男　つボイノリオ　露木茂　鶴橋康夫
【と】東城祐司　戸田桂太　富沢一誠　豊原隆太郎　鳥谷規【な】長井展光　中尾幸男　中込卓也　中崎清栄　中島僚　中島由貴　永田浩三
永田俊和　永野敏一　中町綾子　中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村芙美子　中山和記　並木章【に】新村もとを　西憲彦
西村与志木　仁藤雅夫　二宮文彦【ぬ】沼田通嗣【の】延江浩　信井文夫【は】萩原豊　林健嗣　林宣昭　林安二　原田令嗣
【ひ】日笠昭彦　玄武岩【ふ】深尾隆一　藤井チズ子　藤井正博　藤田知久　藤久ミネ　藤村忠寿　古川重樹【へ】逸見京子
【ま】前川英樹　牧之瀬恵子　増山麗央　松尾羊一　黛りんたろう　丸山友美【み】三上義智　水上毅　水野憲一光原朋秀　三原治
三村景一　三村千鶴　宮崎洋　宮川鑛一【む】村上光一　村上雅通　村上佑二　村田亨【も】本木敦子　元田成　諸橋毅一
【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山鹿達也　山崎隆保　山崎裕　山路家子　山田尚　山田良明　山根基世【よ】吉澤保　吉田賢策
吉村豪介　吉村直樹【わ】和崎信哉　渡辺浩平　渡辺紘史

【賛助会員】　日本民間放送連盟　TBSメディア総合研究所　融合研究所　日本ケーブルテレビ連盟